

中学校三年生の佐藤さんのクラスでは、国語の授業で、「自分の気持ちを相手に伝えるためには、手紙と電話のどちらがよいか」というテーマで討論会を行うこととし、事前にこのテーマに関する自分の意見や立場についてよく考えておくことにしていた。その討論会で「討論」の一部と、それについての「問い」を一度聞き、答える。

佐藤 司会の佐藤です。皆さんには、前回決めた「自分の気持ちを相手に伝えるためには、手紙と電話のどちらがよいか」というテーマについて考えてきてもらいました。だからでもよいので、これからそれを発表してもらいたいと思います。だれか意見はありませんか。

鈴木 はい。

佐藤 ではまず、鈴木さんからお願ひします。

鈴木 はい。ぼくは、自分の気持ちを相手に伝えるためには、電話よりも手紙の方がよいと思います。手紙は、相手に送るまでにじっくり時間をかけて伝える内容を整理したり、自分の気持ちをよりよく伝えるために効果的な表現を吟味したりすることができます。電話では、そうはいきません。うっかり言い間違いをしたら、場合によっては取り返しのつかないことになるかもしれない。

佐藤 今の鈴木さんの意見に対して、電話の方がよいとする立場からの意見はありませんか。

山田 はい。

佐藤 山田さん、どうぞ。

山田 私は電話の方がよいと思います。電話だと、遠く離れた所に住んでいる人にも、思い立った時にすぐ自分の気持ちを伝えることができます。例えば、何かのお祝いをしようと思いついても、それから手紙を書いては、何日か遅れて手紙が届くことになり、気持ちが十分伝わらないという場合も考えられます。やはり思い立った時に、すぐ電話でお祝いの気持ちを伝えたい方が、相手にきちんと伝わるのではないのでしょうか。

佐藤 山田さんからは自分の気持ちを相手に伝えるには、伝えるタイミングが大事な点だ、といった意見が出されましたが、この意見について再び手紙の方がよいとする立場から意見はありませんか。

松本 はい。

佐藤 松本さん、どうぞ。

松本 やはり、遠距離の場合は電話代がずいぶんかかるので、比較のお金がかからない手紙の方がよいと思うんですが……。

佐藤 松本さんも手紙の方がよいという意見ですね。山田さん、電話のよさについてももう少し考えを聞かせてください。

山田 はい。先ほども言いましたが、手紙に比べて手間がかからず、すぐに自分の気持ちを相手に伝えられることが一番のよさだと思います。また、電話は、声の表情や間の取り方で微妙なニュアンスを伝えることができますし、自分の話に対する相手の反応を即座に受け取って臨機応変に言葉を補ったりすることができる点が良いと思います。

佐藤 今の山田さんの意見に対して、手紙の方がよいとする立場から反論はありませんか。

鈴木 はい。

佐藤 鈴木さん、どうぞ。

鈴木 はい。確かに電話は、すぐに相手の反応を知ることができますが、手紙の方が、直接伝えにくい自分の気持ちを素直に表現しやすいと思います。電話だと、聞いている相手のことを意識しすぎて、日ごろ言にくい家族への感謝の言葉などを、うまく表現できるかどうか不安があります。

佐藤 ありがとうございます。ここまでいろんな意見が出されています。もう少し発言していない人にも意見をうかがいたいと思います。

① 山田さんは手紙と電話のどちらがよいと述べていますか。漢字で書きなさい。

② テーマに沿わない発言をしている人物として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 佐藤さん

(2) 鈴木さん

(3) 山田さん

(4) 松本さん

③ 鈴木さんは、手紙のよさを二つ述べています。その一つは、「じっくり時間をかけて伝えたい内容を整理したり、効果的な表現を吟味したりすることができること」ですが、もう一つはどのようなことですか。解答欄に合うように、二十五字以内で書きなさい。

3

次の文章は、鎌倉時代末期の随筆『徒然草』からうかがえる、作者兼好法師のものの見方や考え方の新しさを、他の随筆である『方丈記』の作者が、世界のほろびをほとんど絶望的に追求した結果、結局は、それをどうにもならぬものとして消極的に認めたのと違つて、兼好法師は、生命や世界のほろびを、「たけき河のみなぎり流るるが如し。しばしもとどほらず、ただちにおこなひゆくものなり」と強く肯定したばかりでなく、さらに積極的(たぢまぢま)に「世は定めなきこそいみじけれ」とし、人間がいつまでも生きながらえて死なない(たいそう)とすれば、「いかに、ものあはれもならん」、生命も世界も、ほろびがあるためにかえつて美しさもあり、情趣もフカイのたと主張するのである。

『徒然草』が、四季の風物を、まったく動的に展開させながら描くことができたのも、兼好が『方丈記』の一面的なほろびの論理を乗りこえて、「折節(せつせう)の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ」という自覚、つまり自然もその「移りかはり」において、初めて美しいとすることができたからであり、これは明らかに、『枕草子』の静止的で感覚的な自然のとらえ方から、『徒然草』の叙景を飛躍させた原因でもあった。「ものあはれは秋こそまされ、と人ごとに言ふ」、そのような固定的な季節の美感は、兼好によって、まったく意識的に打ち砕かれたということが出来る。

しかし兼好が、長明の消極的で一面的な論理を乗りこえていくには、『方丈記』の時代から一世紀にわたる中世社会の発展が必要であった。鎌倉時代を通して、長い間の「権威」であった貴族社会のあらゆるしくみが崩れ去つたばかりでなく、新しい「権威」を誇示した上層の領主階級さえ、再びその土台から揺さぶられ始めてきた。すべての形式的・伝統的なものが、その実質によってカチを問われ、南北朝内乱期の入り口に立つ二二三〇年前後、そういう時点で立つて、『徒然草』は書かれたのである。

こうして、『方丈記』の消極的で否定的な論理は、否定を通した上での積極的で肯定的な論理に発展する。「たけき河のみなぎり流るるが如し」と生命の転化をとらえることのできた彼は、続いて、春暮れてのち、夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣、下に設けたる故に、待ちとるついで甚だはやし。生・老・病・死の移り来る事、又これに過ぎたり。四季はなほ定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干渴(うたがひ)なれども、磯より潮の満つるが如し。

というような、素晴らしい自然観や生命観にまで到達したのである。春が暮れてしまつて、夏に入り、夏がすっかり終わってしまったから秋が来るというものではない。夏の季節のうちに、すでに秋の氣ははぐくまれてゐる。冬の季節の中で、梅のつぼみは次第にふくらむのだ。秋の木の葉が落ちるのも、古い葉が落ちて後に新芽が初めて出るのではない。逆に下から押し上げてくる新芽のきざしに堪えかねて、朽ちた古葉は落ちるものだとする兼好の鋭い観察は、静止的な形式論理からは、とうてい出てこないものであり、特に古いものの没落を、新しいものの発展、つまり、たたかひを通して押し上げてくる力の結果であると考え、また死が次第次第に前から来るばかりでなく、いつの間にか急に後ろに迫ってくる場合があり、もの転化や発展は、必ずしも漸進的(ぜんしんてき)にばかりでなく、飛躍的に押し進

4

共通語の「たいそう・とても」とほぼ同じ意味で使われる各地の方言として、「なまら」(北海道)、「かつたに」(新潟県)、「ぼっこう」(岡山県)、「えずう」(福岡県)などがある。私たちは、普段の生活の中で共通語のほかに、このような、自分が暮らしている地域の方言を使うことがあるが、人によってその使用の度合いは異なっている。あなたは、今後、方言を進んで使つていきたいと思うか。あなたの意見文を、あとの条件に従つて二百字以内で書きなさい。

められるものであるという事実を、自覚的に打ち出すことができたのは、まったく驚くべき論理の発見であり、自然や生命の転化を、いわば弁証法的な発展においてとらえることのできた兼好の感覚や思想の新しさ・確かさであるとしなければならぬ。

(出典 西郷信綱・永積安明・広末保「日本文学の古典」)

(注)

『方丈記』——鎌倉時代初期の随筆。作者は、鴨長明。ほろび——滅び。なくなる。弁証法——対立や矛盾を克服・統一することによって、より高い次元の結論に到達する発展的な考え方。

① ———の部分②、③を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「とどほらず」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

③ 「積」という漢字を行書で書いたものとして適当なのは、(1) (4)のうちではどれですか。

(1) 績 (2) 漬 (3) 債 (4) 積

④ 「『枕草子』の……とらえ方」とあるが、筆者が「静止的」と考えているのは、『枕草子』における自然のとらえ方のどのような点だと考えられるか。それを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、□□の中に示した『枕草子』の一節の内容を例に挙げながら、四十文字以内で書きなさい。ただし、解答はすべて現代語で書くこと。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

⑤ 「兼好が、長明の……乗りこえていく」に当たり、どのような時代が影響を与えたか筆者は考えているか。その説明として最も適当なのは、(1) (4)のうちではどれですか。

- (1) 文学そのものに対する社会の信頼が著しく失われる時代。
- (2) 形式的・伝統的なものがその実質によって試される時代。
- (3) 長い間の「権威」や伝統がよりいっそう尊重される時代。
- (4) 形式的・伝統的なものがすべてそのまま保持される時代。

⑥ 「死が……迫ってくる」とあるが、これとほぼ同じ内容を比喩表現を用いて述べた部分を、『徒然草』の原文中から二十一字以上二十五字以内で抜き出し、そのはじめの三字を書きなさい。

⑦ この文章で述べられている内容に最もよく当てはまるのは、(1) (4)のうちではどれですか。

- (1) 兼好は、四季の変化を鋭く観察し、古いものの没落は新しいものを内にはらむことで生じると考えた。
- (2) 兼好は、『枕草子』で述べられた「生・老・病・死」についての考え方を発展させ、独自の生命観を確立した。
- (3) 兼好は、「ほろび」を絶望的なまでに追求した長明が死を消極的ながら認めたことに、強く賛同した。
- (4) 兼好は、貴族社会における文学性を十分に継承した作品を、積極的に作り上げていこうとした。

条件

- 1 三段落構成とし、第一形式段落には、あなたの主張を、第二形式段落には、予想されるあなたと異なる立場の意見を、第三形式段落には、あなたの主張の根拠や理由をそれぞれ書くこと。
- 2 あなたの主張が的確に伝わるよう、根拠や理由を明確にするとともに、段落どうしのつながりに注意すること。
- 3 原稿用紙の書き方に従うこと。

| | |
|--------|----|
| 受番 | 検号 |
| (算用数字) | |
| 志願校 | |

解答用紙

※

1

①

②

③

③

しよ。

2

①
㊦

つた

に

②
㊦

に

に

③
㊦

やかさ

やかさ

②

②

③

③

④

④

ということをつかてほしいという思い。

3

①
㊦

い

い

②
㊦

㊦

②

②

③

③

④

④

を美しいものとして自然をとりこんでいる。

⑤

⑤

⑥

⑥

⑦

⑦

4

4